鉄砲洲神社素読論語　解説
（平成 25 年 11 月 8 日）

【一六】葉公　政を問う。子曰く、近き者　説ぶときは、遠き者　来ると。

葉公が孔子に「政治の要諦はどういうものであろうか」と聞いた。葉公は楚という国の葉という地方の長官というよりお殿様。君主ではないけれども、その地域のトップです。かなり穏やかな人物でした。孔子が答えるには、かなり出来た人物ではないとこういう言い方はしないと思うのですが、「自分の身の周りにいる人が喜んで毎日が幸せで楽しいという風に暮らせば、遠いところから評判を聞いて人は集まってくるものだ」ということを言っています。なかなか自分の身の周りの人達にというのは難しいです。

渋澤論語を読みますと、自分の身の周り、家庭を考えなさいとあります。家の中がキチンと治まって主人を大黒柱として立てて、周りがみな家長を尊敬する、一家和合の道を実行するようであれば、親戚や近隣の者も遠い人も寄って来て自分を尊敬してくれるものです。国の大事なことをしようと思えば、一家をキチンとまとめるべきであるという風に渋澤さんは語っています。前にも申し上げていますが、渋澤さんが講演する時に学生から「貴方は立派な人だと聞いていたけれど、女性に対してはだらしがないそうですね」と問われたら「私は下半身については何も答える資格が無い。君達の想像する通りである」と答えたという逸話があります。でも人徳があるので、下半身はだらしがなくても人々はたくさん寄ってくる。利に対する行動が浮氣心を相殺したのではないでしょうか。人間として何を判断基準にするのかという点では、論語は確かに良いものだなと感じます。自分の身の周りの人々が慕って集まって来てくれるということがあれば、こういう人達も集まってくれるものだと感じます。

【一七】子夏　莒父の宰と為り、政を問う。子曰く、速かなるを欲すること無かれ。小利を見ること無かれ。速かなるを欲すれば、則ち達せず。小利を見れば則ち大事成らずと。

孔子が七十代、子夏は二十代半ばで、おじいさんと若者との対話だと考えると良いでしょう。先ほどの葉公は穏やかで出来上がった人物。対して子夏は若者で、地方の開拓を任

され氣負ってがんがんやりたい。なので孔子の答えは違います。いわゆる若者が新しいポストに就いた。孔子が若い弟子に、いっぺんに功績を上げようなんて考えてはいけない。一氣にやっても素晴らしい業績を上げられるものではない。あんまり即座に業績を上げようということを考えてはいけないし、周りにあからさまに見せるようなことはしてはいけない。目の前の小さな利益なんて考えないで、なるべく 10 年 20 年という単位でものを見なさい。それを考えず即座に効果があることで、目の前の小さい利益を手中に入れようとすれば、これも後々大事業を成すところまでいかない。達することはない。目の前の小さなもので満足してしまうことになるだろう。若者に対する訓言みたいなことを細かく教えていると感じます。

今の時代にあわせて見れば、この間、山本太郎議員が天皇陛下に手紙を出して直訴をしたということがありました。若い議員が国会議員になり政治家になって、まず何をやろうかと考えたところ「あいつはたいしたもんだ」と即座に言われるようになりたい。それには、どうしたらよいか。天皇陛下に直訴することによって自分の功績を世の中に問うというスタイルをしたい。色々な情報を見てみますと、天皇陛下の前に出て行った時に役人達から後ろに追いやられても前に出てテレビに映るところに立っていたことを繰り返していて、常にテレビの中に映るように動き回っていた。小利を見すぎたのだろうと感じます。目先の小利を見れば大事にならず。目先の自分の利益だけを考えてやったのだろうという風に透けて見える感じがします。

安倍さんのアベノミクスは小利を見すぎているから、大事にはならずと結論付けられます。目先を見すぎているなと感じます。

先月は出雲大社と伊勢神宮に行って来ましたが、今月は動くことが多く青森・弘前・京都に行きまして昨日戻りました。日本は外国と違って辺境の地といいながらも隅々まで道路は舗装されているし、田んぼも耕してあるから、他の国から比べて日本人の素晴らしさは辺境でも発揮されていますので、孔子の答え方も今の日本を見れば変わるのではないかという氣がします。